川上式聖書研究会　キリスト教原点の学び(創世記・マルコによる福音書)⑰　　2026. 2. 4.

聖書:マルコによる福音書 4:26-32,　　讃美歌:199「ひとつぶのからし種のよう」

1. 前回のおさらい　イエスに従った人々
＊「メシアの秘密」　なぜイエスは自分がメシアであることを「黙ってよ」と命じたか？
＊人々のイエスに託す期待と、イエス自身の思いとのギャップ
＊「栄光のメシア・勝利のキリスト」ではなく、「癒し人としてのメシア、苦難を背負うキリスト」

2. マルコ 4:1-20 「4 つの種の譬え」
＊種＝み言葉、 まかれた地＝人の心
＊①すぐサタンに奪われる　②根が無いので焼かれて枯れる　③世の誘惑に負ける　④豊かに実を結ぶ
＊「種」「まかれた地」ではなく、「種を蒔く人」 効率優先×　すぐに成果を求めず種を蒔く
＊イエスのﾒｯｾｰｼﾞ　＝　譬え　／　神の国の心理を「難しい理屈」×　身近な事柄に置き換える（譬えの名人）
＊「神の国(ﾏﾀｲでは「天国」)」とは？→　×死後の世界(来世)　〇現世に訪れる理想世界　「神の国は近づいた」

3. マルコ 4:21-25 「ともし火と秤の譬え」
＊ともし火は隠れた所に置かない　台の上→周囲を照らす(明らかにする)　神の国＝×隠す者　〇みんなに公に…
＊秤＝ここでは自分が量る秤(量った分を与えられる)
＊量るのは「神の国」「神の言葉」→　それをどう聞くか、どれほど聞くか　→　恵みが与えられる量も変わる
＊神の国はみんなに占めされている(ともし火)　それをどれだけ聞くかで格差　/「神の国」に関する厳しさ？

4. マルコ 4:26-29 「成長する種の譬え」
＊神の国・神の言葉の発展について、底抜けの楽観的な信頼
＊まかれた種(み言葉・神の国)は、「いつか・やがて」成長する　どうしてそうなるか、「人は知らない」
＊人間の采配に左右されずに、神のわざは自ずと発展・展開する　(現実の浮き沈みに左右されないマインド)

5. マルコ 4:30-32 「からし種の譬え」
＊「小さなものが大きくなる」
＊ユダヤ教の伝統的な神の国の理解＝天変地異と共に、劇的・圧倒的な形で訪れる
＊しかしイエスの神の国の理解は、「からし種」　→　初めは小さいが成長すると大きくなる
＊イエスが病人・貧者・被差別者を訪ね、病と心の癒しを行なう　→　その一つ一つが神の国　(小　→　大)
＊マタイ・ルカに記された「パン種の譬え」
＊マタイにだけ記された「毒麦の譬え」(ﾏﾀｲ 13:24-30 P.25)　その時点の状態で短絡的に評価してはいけない
＊「からし種」とは？　→　やっかいな雑草　農作業では「じゃま者」　そんな中に「神の国」
＊エリートが見下し、低い評価を下す人々　→　イエスは声をかけ、癒し、共に生きる
「医者がいるのは病人　私は罪人を招くために来た」(ﾏﾙｺ 2:13-17)

◆2026 年 3 月の聖研祈祷会は、3 月 4 日(水)の予定です。